

## 森の妖精ナヨテンマ

杉野孝雄



高草山



高草山



高草山



東伊豆町

ラン科の菌従属栄養植物ナヨテンマ *Gastrodia gracilis* Blume を森の妖精と呼ばれたのは津山尚博士で、幻の植物であったナヨテンマが発見され、学会に発表されるまでのことを書かれた論文、「落ち葉の中の妖精たち」雑誌『遺伝』34巻(1980)の中で命名されています。薄暗い林の中に朱赤色の唇弁が鮮やかなナヨテンマのたたずむ姿は、まさに森の妖精です。ナヨテンマは C.J.Textor が長崎付近で採集し、オランダに送った標本に基づき、1856年に植物学者 Blume が記載した植物です。幻であったのは、この植物を生きている状態で見えた人が、100年以上いなかったからです。

掛川市内でこの植物に初めて出会ったのは、1964年6月28日のことです。*Gastrodia* と直感しました。津山尚先生が『植物研究雑誌』に、ナヨテンマのことを牧野富太郎博士の収集品を材料に、連載されておられるのを読んでいたので、ナヨテンマと同定しました。しかし、植物分布の調査が行き届いている日本では、未知の高等植物が発見される機会はほとんどなく、100年以上発見されていない植物が出現してくるとは思いませんでした。

標本も少なかったので翌年再採集して、当時、お茶の水大学におられた津山尚先生に標本と写真をお送りしました。先生からは速達でご返事をいただき、お手紙には、「——— お手紙、写真、標本拝見しました。まだ解剖はしてありませんが、*Gastrodia* であり *gracilis* である確率の高いものです。——— もし *gracilis* とすると日本人で、この種を生々の状態で見えた最初の人です。お祝い申し上げます。———。」とあり感激しました。その後、津山尚先生は現地を調査され、筆者もお手伝いして、『植物研究雑誌』に「日本産オニノヤガラ属雑記(3)」として、完全な記相文を発表されました。

ナヨテンマの特徴は、花期は6-7月。シロテンマに似て直立し、草丈は10~60cm。葉緑体はなく淡褐色。太い肥厚した根茎があり、茎に鞘状に鱗片葉をまばらにつけます。花は総状に1~16個つき、萼片と側花弁は合着し筒状。唇弁は朱赤色を帯び、三角形で基部は切形、縁は細裂していません。花後、花柄は10cmほど伸長します。果実は7月に熟し、長楕円体で1~3個、希に4個、果実をつけない個体も多くあります。果実には微細な種子が多数入っています。掛川市内で採集し記相文に使用された標本は、東京大学総合研究博物館に保管されています。